

038 頰椎捻挫（追突された事故）

女性 四十三歳

主訴 左頰から上腕にかけて鈍痛、しびれ、背部痛

現症 昨日追突され、整形外科に行ったが、処置に満足できず、来院する。

所見 事故のショックで本人は少し興奮していた。彼女の症状は神経根までいっていない捻挫型と考え、そんなにかかからないだろうと判断し、本人にもそう伝えた。
脈は「やや虚」。胸鎖乳突筋の緊張あり。腹証は「左中注」～「大巨」にかけて圧痛がでている。

処置 「扁桃」、「丘墟・上四瀆」、「帯脈」、「横V字」、「瘀血」。
上腕まで及んでいたしびれは1回でとれる。

経過 その後、合計11回、34日目ではほぼよくなる。
決定的に効いたのは「帯脈」のようだ。というのは、この処置をした後、頰肩の回旋や拳上等の運動をさせるといつも顔がほころんでいた。「帯脈」は筋肉の強張りだけでなく、彼女の顔の強張りも治してくれた。

「帯脈」（症例034、症例035、症例036、症例037、症例038）

数多くある長野式処置の中で最も即効を発揮するのがこの「帯脈処置」である。腰背痛を始め、坐骨神経痛、頰肩腕痛、五十肩、各種関節痛、頭痛、顎関節症、リウマチなど枚挙にいとまがないくらい応用範囲が広い。なぜこれだけの効果があるのだろうか。症例を交えて考えてみたい。

1) 「体幹伸筋と体幹屈筋の切換点（調節ポイント）」

人間の体は屈げたり伸ばしたり、捻じったりと色々な動きができ、それを可能にしているのが、筋、靭帯である。その中心軸は体幹であり、これに脊柱起立筋、大臀筋、大腿四頭筋等の体幹伸筋群と、腹筋、大腿二頭筋などの体幹屈筋群が拮抗的にくっついている（体の回転、捻れは脊柱起立筋が主に行う）。これらの筋肉群の中心に「帯脈」が位置している。これは内・外腹斜筋、腹横筋の起始部中央にあたる。

施術ポイントとして、腹筋が緩んでいる人や肥満体型、婦人科の手術をした人などは腹筋の後面や脊柱起立筋が緊張もしくは硬化している場合が多いので、通常の「帯脈」より2～3寸後方にとる。これを「後帯脈」といつているが、この部の硬化や緊張をとると、先ほどあげた腰背痛や頰肩痛などが楽になってくる。

2) 「解剖上の意義」

この「帯脈」には、内・外腹斜筋、腹横筋、広背筋が関わり、血管では鎖骨下動脈や外腸骨動脈と連絡している下腹壁動脈、そして胸大動脈、腹大動脈から起こり内腹斜筋、腹横筋の間を通過して腹壁に分布している肋下動脈が近くにある。神経では肋間神経や腸骨単径神経が分布している。つまり解剖的には頰部から胸部・腹部・背部・腰部・下肢と広範囲にカバーしていることになる。

3) 「古典的意味」

「帯脈」には胆経として、そして奇経としての2つの側面がある。「帯脈処置」の帯脈は正経もさることながら奇経の帯脈という意味合いが強くでている。

古典を尋ねてみる。「帯脈は胸腹両側の季肋部におこり、腰帶をしめるように腰を一周する」(難経第28)

これが代表的な記述で「十四経發揮」もこれに従っている。「奇経八脈考」は次のようにいっている。

「奇経の帯脈は章門穴より起り、帯脈穴を循って身を周ること帯のめぐるが如く、諸経を管束するを以って帯脈という」

この中の「諸経を管束する」というように、より具体的な記述がなされている。

実際、臨床で使ってみていろんな症状、疾患に効果があるのが実感としてよくわかるのである。まさに諸経に対応している。